

旧約聖書における「正義」

樋口 進

キーワード：正義、公正、旧約聖書、預言者、平和、戒め、秩序

はじめに

夙川学院の教育理念は、「イエス・キリストの教えを根本とし、正義と平和を愛する徳の高い人を育てることを目的とする」である。ここで「イエス・キリストの教えを根本とし」とあるが、イエス・キリストは、人間の生にとってこの「正義」が重要であることを主張した。例えば、マタイによる福音書 23 章 23 節（ルカによる福音書 11 章 42 節）において「律法学者たちとファリサイ派の人々、あなたたち偽善者は不幸だ。薄荷、いのんど、茴香の十分の一は献げるが、律法の中で最も重要な正義、慈悲、誠実はないがしろにしているからだ。これこそ行うべきことである」と言って¹、当時のユダヤ教の指導者たちが最も重要である正義、慈悲、誠実をないがしろにしている実態を批判した²。そして、イエス・キリストの主張した「正義」は、旧約聖書の思想の影響であると考えられる。そこで、本稿では旧約聖書において「正義」がどのように言われているかについて検討する。

1. 古代オリエント一般における「正義」

現代において正義は、人間の働きと相応の報酬、裁判やスポーツにおける公平な審判、社会秩序、万人に平等な権利の保障である。一般的にはこのような公平さや社会秩序を乱すものを悪と見なし、その悪に対抗し、悪を滅ぼす力を正義と呼んでいる。また正義はそれを犯す者に対する厳格な裁判や処罰を伴うものとして理解され、その正義が保たれているところに平和が実現されると考えられている³。

¹ 聖書の引用は、指示がなければ、『聖書 新共同訳』（日本聖書協会、1989年）による。

² ここでイエス・キリストは、「正義」と同じように重要なこととして「誠実」を挙げているが、夙川学院短期大学（神戸教育短期大学）の教育理念で「愛と誠実」が謳われており、「愛」も「誠実」も聖書の思想（イエス・キリストの教え）の影響である（拙稿「聖書における『愛』と『誠実』」『夙川学院短期大学教育実践研究紀要』第13号参照）。

³ 中道基夫「正義」、(関西学院大学キリスト教と文化研究センター編『キリスト教平和と学事典』教文館、2009年、p. 225 参照。

古代世界においては、「正義」はもう少し包括的な意味合いを含んでいた。古代オリエントにおいて、「正義」という概念は、中心的なものであり、人間の救済にとって重要な意味をもっていた⁴。これは法的領域に限定されるものではなく、倫理、政治、宗教、自然をも包含するものであった。それは根本的に、世界全体の基盤となる正しい秩序である、と考えられた。人間の行為（そしてまた神の行為）は、それが世界秩序ないし世界に内在する意味と一致する場合に正しいとされた⁵。そして、世界秩序としての「正義」は、知恵と結びつけられた。古代エジプトの「知恵」の女神マアトは、太陽神ラーの娘であるが、「真実」「正義」あるいは「世界秩序」を意味するという⁶。「彼女は原初時代にあらゆるものの正しい秩序として人間の所へ下ってきた」と言われている。そして、あらゆる行為においてマアトに正しく従う人は、自分の生活を正しく処理し、成功することができるとされた。生活の正しい秩序に意識的に注意を向けることによって人生の成功を手に入れようと努める行為において、人間は同時にマアトによって定められ、究極的には神に基づく秩序に従うとされた⁷。

2. ヘブライ語における「正義」

旧約聖書の原語であるヘブライ語において、「正義」はツェデク（男性名詞）とツェダカー（女性名詞）である。旧約聖書において、ツェデクは117回、ツェダカーは155回出る⁸。また、ミシュパートもしばしば「正義」と訳され、これは旧約聖書に422回出る⁹。ツェデクとツェダカーは、古代オリエントにおける「世界秩序」という概念に起源があり、それがカナン神話を通して古代イスラエルに受容されたものと思われる¹⁰。カナンにおいてそれは、いろいろな領域における世界秩序を言い表すものであった¹¹。カナン神話においては、至高神の特質がこの語によって言い表されたが、古代イスラエルにおいてもこの語は神ヤハウェと結びつけられ、ヤハウェは「義の神」と考えられた（詩編9編参照）¹²。

ツェデクとツェダカーは、「真つ直ぐな」「しっかりした」「固い」「基準にかなった」などの基本的な意味があり、旧約聖書においては、「正義」「公義」「公平」「公正」「勝利」「救い」「助け」「繁栄」「義」などと幅広く訳されている。また、ミシュパートは、「公義」

⁴ 「義」、A. ベルレユング、C. フレーフェル編『旧約新約聖書神学事典』教文館、2016年、pp. 228-229 参照。

⁵ 同上。

⁶ W. ツィンマリ『旧約聖書神学要綱』樋口進訳、日本キリスト教団出版局、2000年、pp. 142-143 参照。

⁷ 同上。

⁸ Cf., F. Brown, S. Driver and C. Briggs, *The Brown-Driver-Briggs Hebrew and English Lexicon*, Hendrickson Publishers, 1996, pp. 842-843.

⁹ *op. cit.*, pp. 1048-1049.

¹⁰ 並木浩一「義」、東京神学大学神学会編『旧約聖書神学事典』教文館、1983年、p. 64 参照。

¹¹ W. ツィンマリ、前掲書、p. 226 参照。

¹² 並木浩一、同上参照。

「公道」「公正」「正義」「法」「裁き」などと訳され、両者がほとんど同義で用いられている場合も多い。しかし、ツェデク、ツェダカーには倫理的意味合いがあり、ミシュパートには法的意味合いがあるとも言われる。また両者が対で言われていることも 50 箇所以上ある。いずれにしても、両語は神の特性とされ、人間の生において神や人との正しい「関係」を表す最も基本的な語とされている。

3. 旧約聖書全般における「正義」

「正義」は、聖書における神観・人間観・世界観・思惟方法の根本に関わる事柄であり、最も重要な概念のひとつである¹³。この語は基本的に、神との関係が正しいこと、そして人との関係が正しいことを表すが、その「正しい」は神の意志において正しいことであり、その判断は神による。人間的に見て「正しい」と思われることであっても、神の意志においては「正しくない」こともある。ヘブライ語のシャローム（平和）もそのような意味合いがあり、両者は密接に関連している¹⁴。

「正義」を意味するヘブライ語のツェデクは、旧約聖書においてしばしば「義」と訳されるが、この「義」はまず第一に神の重要な属性である。出エジプト記 9 章 27 節では「正しい（ツァディーク）のは主（ヤハウエ）である」と言われている。また、「正義」は神による世界支配の礎とされている。詩編 89 編 15 節には「正義（ツェデク）と公正（ミシュパート）は王座の礎」とある¹⁵（詩編 97:2 も参照）。また、「正義」は神の救済行為の真髄とされている（士 5:11, サム上 12:7, 詩 11:7, 103:6, イザ 45:24, ミカ 6:5 参照）¹⁶。ヤハウエは正しい裁き（ミシュパート）を行い、それによって虐げられている人、貧しい人、やもめ、みなしごなど弱者を救うとされている（詩 68:6, 83:3-4, 140:13, 146:7-9 参照）。圧迫される弱者の側から見れば、神の正義こそは、彼らにとってその権利の保証であり、救いの希望である。そして、ヤハウエは「正義」をもって、正しい裁きを行うとされている。創世記 18 章 25 節においてアブラハムはソドムを滅ぼそうとしているヤハウエに対して「正しい者を悪い者と一緒に殺し、正しい者を悪い者と同じ目に遭わせるようなことを、あなたがなさるはずはございません。全くありえないことです。全世界を裁くお方は、正義を行われるべきではありませんか」と言って、ソドムに住む甥のロトを救おうとした。

イスラエルの非常に古い歌とされている「デボラの歌」（士 5 章）においては、「ヤハウエの正義（ツェダカー）が神の民イスラエルに救い（ツェダカー）を与え、その敵を打ち砕いた」

¹³並木浩一、前掲書 p. 64 参照。

¹⁴ 樋口進「旧約聖書における『平和』思想」、『夙川学院短期大学研究紀要』第 45 号、2018 年、p. 5 参照。

¹⁵ 『聖書 聖書協会共同訳』日本聖書協会、2018 年による。

¹⁶ 旧約聖書の書名の略語は『聖書 新共同訳』日本聖書協会、1989 年の略語に従う。

と歌われている（士5:11）¹⁷。また、ミカ書6章5節では、ヤハウェが周辺の敵からイスラエルを救った行為を「主の正義（ツェダカー）の業」と言っている。また、詩編40編11節では、ヤハウェの正義とイスラエルの救いが同義となっている。G.フォン・ラートは次のように言っている。「最古の時代からイスラエルにおいてヤハウェは、民に『正義（ツェダカー）』の賜物を与えるものとして称えられてきた。このイスラエルに与えられる『正義』は常に救いの賜物である。¹⁸」

また、詩編45編8節において「あなたは義（ツェデク）を愛し、悪（ラシャア）を憎む」と言われており、ヤハウェは正義の神であり、悪を憎み、悪しき者を裁く神である。預言者アモスは、イスラエルの神ヤハウェを「正義の神」と特徴づけた。アモス書5章24節には「公正（ミシュパート）を水のように、正義（ツェダカー）を大河のように、尽きることなく流れさせよ」（聖書協会共同訳）とあるが¹⁹、これがアモスの中心的な主張である²⁰。

旧約聖書には、「正しい」神によって創造された世界は、良い秩序である、という考えがある²¹。創世記1章において、神は7日に分けて天地万物を創造したと記されているが、7は聖書において完全数を表し、それゆえ神によって創造された世界は完全に秩序あるものだということが意図されている。神は創造された世界を見て、「極めて良かった（トープ）」と言ったが、これは正しい秩序を言い表している。ツェデクとツェダカーは、特に詩編と第二イザヤ（イザヤ書40-55章）、第三イザヤ（イザヤ書56-66章）においてしばしば自然領域においてさえ認識することのできるヤハウェの恵み深い秩序を表すのに使われている²²。

古代イスラエルにおいて、王は神によって選ばれ（申17:15参照）、預言者によって油注がれた者であった。それゆえ王は、神の代理として、神の「正義」を仲介するものと理解された²³。列王記上10章9節に「あなたをイスラエルの王位につけることをお望みになったあなたの神、主はたたえられますように。主はとこしえにイスラエルを愛し、あなたを王とし、公正と正義を行わせられるからです」とあるように、神は「公正（ミシュパート）と正義（ツェダカー）」を行わせるために王を選んだとされている。従って王は、貧しい者や弱い者のために尽力する責任をはじめから負っている（詩72:4, 12-14, 箴31:8-9も参照）。王が貧しい者や弱い者を

¹⁷ この最初のツェダカーは、「新共同訳」では「救い」と訳されているが、「聖書協会共同訳」では「正義」と訳されている。

¹⁸ G.フォン・ラート『旧約聖書神学』1、荒井章三訳、日本キリスト教団出版局、1980年、p.499。

¹⁹ ここで「新共同訳」では、ミシュパートが「正義」と、ツェダカーが「恵みの業」と訳されているが、ミシュパートは「公正」、ツェダカーは「正義」という訳が適切であろう。「聖書協会共同訳」ではそう訳されている。

²⁰ 樋口進、前掲書、p.5-7参照。

²¹ W.ブルッゲマン「義」、『旧約聖書神学用語辞典』長谷川忠幸訳、日本キリスト教団出版局、2015年、p.129参照。

²² W.ツィンマリ、前掲書、p.226参照。

²³ A.ベルレユング、C.フレーフェル編、前掲書、p.228参照。

保護せず、不利な立場に追いやる時には、預言者によって激しく非難された（イザ 1:17, エレ 22:15-17、アモ 2:6-8 参照）。現実の王は、このように「正義」を行わず、預言者に非難されることが多かった。詩編 72 編には、イスラエルにおける本来の王のあり方が述べられている。1-2 節には「神よ、あなたの公正（ミシュパート）を王に、あなたの正義（ツェダカー）を王の子にお授けください。彼が正義（ツェデク）によってあなたの民を、公正（ミシュパート）によって苦しむ人を裁きますように」（聖書協会共同訳）とある。また 4 節には「王が民の中の苦しむ人を裁き、貧しい人の子らを救い、虐げる者を砕きますように」とある。また 7 節には「王の治世に正しき人（ツァディーク）が栄え、月の失われるときまで平和（シャローム）が豊かにありますように」（同）とある。また 12-14 節には「王が、叫び声を上げる貧しい人を、助ける者もない苦しむ人を救い出しますように。弱い人、貧しい人を憐れみ、貧しい人の命を救い、虐げと暴力からその命を贖い、王の目にその人たちの血が、貴いものでありますように」（同）とある。これは、理想的なイスラエルの王の姿であるが、現実の王はこのようではなかった。

紀元前 587 年にイスラエルが滅亡すると、現実の王はいなくなったが、メシアがその理想的な王の姿として期待されるようになった²⁴。メシアには驚くべきカリスマが与えられ、彼は神の「正義」を貫徹する、と期待された²⁵。イザヤの「メシア預言」において（イザ 8:23-9:6）、「その主権は増し、平和には終わりが無い。ダビデの王座とその王国は、公正と正義によって立てられ、支えられる。今より、とこしえに。万軍の主の熱情が、これを成し遂げる」（聖書協会共同訳）と、メシアが到来すれば、平和（シャローム）が永遠に続くが、それはメシアが「公正（ミシュパート）」と「正義（ツェダカー）」でもって支配するからだと言われている（イザ 16:5, 32:1 も参照）。メシアは「正義（ツェデク）」を腰の帯とするので、動物界にも平和をもたらすと言われている（イザ 11:5-8）。メシアのそのような働きは、平安に達し、平安は社会的な秩序、調和、安全、平和（イザ 32:17 参照）を意味するが、それと共に祝福豊かに「自然」へと広がり、豊かさを促し、実り確かなものとする（詩 72:5-7, 15-17 参照）²⁶。

第二イザヤは²⁷、「主の僕の歌」と言われている詩を 4 つ残している²⁸。この「主の僕」が誰であるかということは、いまだに決着のついていない旧約学の大問題であるが²⁹、現実の人物

²⁴ 「メシア」は、ヘブライ語で「油注がれた者」を意味するが、それは王国時代に王が即位する時に預言者によって油を注がれたからである（サム上 10:1 [サウル], 16:13 [ダビデ], 王上 1:34 [ソロモン], 王下 9:6 [イェフ] など）。

²⁵ G. フォン・ラート、前掲書、p. 497 参照。

²⁶ A. ベルレユング、C. フレーフェル編、前掲書、p. 229 参照。

²⁷ イザヤ書 40-55 章が、紀元前 8 世紀にエルサレムで活動した預言者イザヤの預言とは区別され、紀元前 6 世紀にバビロン捕囚の地で活動した預言者の預言であるということは、19 世紀のベルンハルト・ドゥーム以来定説となっている。この預言者の名が分かっていないので、一般に「第二イザヤ」と呼ぶことが通例になっている。

²⁸ イザヤ書 42 章 1-9 節、49 章 1-7 節、50 章 4-11 節、52 章 13 節—53 章 17 節。

をモデルにしたものではなく、将来のメシアの像であるという説もある。そして新約聖書においては、特にイザヤ書 53 章の人々の身代わりに苦難を受ける描写がイエスの苦難と似ているので、この「主の僕」はイエスの到来の預言である、と解釈された（使 8:26-40 参照）。この「苦難の僕の歌」において、ヤハウェがこの僕を「正義とする」と言われている（イザ 50:8）。

預言者ゼカリヤもメシア預言をしている。すなわち、ゼカリヤ書 9 章 9 節には「娘シオンよ、大いに喜べ。娘エルサレムよ、喜び叫べ。あなたの王があなたのところにやって来る。彼は正しき者であって、勝利を得る者、柔和で、ろばに乗って来る。雌ろばの子、子ろばに乗って」（聖書協会共同訳）とある。ここでこのメシアは、「正しき者（ツァディーク）」と言われている。すなわち、「正義」を行う者である。そして、この「ろばに乗って来る」メシアは、新約聖書ではろばに乗ってエルサレムに入城したイエスの預言とされた（マタ 21:4-5 参照）。

旧約聖書において、王以外の人も、あらゆる個人が共同体を意識した行為を通じて「正義」の状態を安定させ、非社会的な行動によってこれを阻害しないように義務づけられていた³⁰。ここでの「正義」は、人間的な判断ではなく、あくまでも神の判断、神の意志である³¹。何が「正義」であるか、誰が「正義」であるかは、ヤハウェのみが定める。そして、この神の承認によって人は生きることができるとされる。エゼキエル書 18 章 9 節には「私の掟に従って歩み、私の法を守り、真実を行うなら、彼こそは正しき者（ツァディーク）であり、必ず生きる」（聖書協会共同訳）とある。この「正義」の概念は、人間と神との関係のみならず、人間同士のとりとめもない争いというような関係に対する基準、また人間と動物との関係、さらに人間と自然環境との関係に対する基準でもある³²。

初代のイスラエルの王サウルは、嫉妬心から部下のダビデを迫害した。しかしダビデは、主君を殺すチャンスがあったにもかかわらず、神が王として選んだ（主が油を注がれた）サウルをあえて殺さなかった（サム上 26 章）。その時、「主は人の正しい行い（ツェダカー＝正義）と忠実さに応じて、それぞれに報いてくださいます」と言っている（23 節）。自分の命を狙う者を殺すのは、人間的に見て「正義」かも知れないが、神の選んだ者を殺すことは神の意志からは「正義」ではない、ということであろう。また、民数記 25 章 1-9 節には、イスラエルの民がペオルにおいてモアブの娘たちの誘惑によってバアルを崇拜したという記事がある。そのとき、ピネハスは槍でその偶像崇拜者を殺したが、詩編 106 編 31 節では「これは代々とこしえに、ピネハスの義（ツェダカー）と見なされた」とその殺害が「正義」と見なされている。

創世記 15 章において、アブラハムはヤハウェにより自分の子孫が天の星のようになると言われた時、それを素直に信じた。そのとき「主はそれを彼の義（ツェダカー）と認められた」と

²⁹ 樋口進『古代イスラエル預言者の特質』新教出版社、2013 年、p. 264 参照。

³⁰ A. ベルレユング、C. フレーフェル編、前掲書、p. 229 参照。

³¹ 並木浩一、前掲書 p. 65 参照。

³² G. フォン・ラート、前掲書、p. 492 参照。

言われている。これは新約聖書のパウロに大きな影響を与えた句であり（ロマ4:20-22、ガラ3:6参照）、後にキリスト教の「信仰義認」の教理となり、マルティン・ルターもこれに基づいて当時のカトリック教会の「贖宥状（免罪符）」を批判し、これが契機となって宗教改革に至った。ここでアブラハムは、ヤハウェの約束を素直に信じたことによって「正義（ツェダカー）」と認められたのである。

旧約聖書において「正しい人（ツァディーク）」として特徴づけられているのは、「与える人」であり、特に貧しい人や弱い立場の人を保護する人である（詩112:4-9参照）。箴言において「正しい人（ツァディーク）」は、高潔と誠実をもって生き、自分の態度と行動によって共同体に安定をもたらす人々を指す（箴10:2, 7, 11, 11:5, 6, 8, 10など）。「正しい人」の反対語は「悪しき人（ラシャー）」であり、これは常に利己的、貪欲、破壊的であることが特徴的で、貧しい者を配慮しない（詩10:3-4, 8-11、エレ5:27-28参照）。しかし、「悪しき人」でも、自らを悔い改めるなら、「正しい人」と認められるであろう（ヨブ33:24-26参照）。

対になっているアルファベット詩である詩編111編と112編において、人間の正しい行為はヤハウェの正しい行為の反映とされている。111編では、ヤハウェの正しい行為がほめたたえられており、112編では、ヤハウェを畏れる人の行為がたたえられている。そして、両方の3節では「その正義（ツェダカー）はいつまでも続く」と同じフレーズが繰り返されている。すなわち、神の固有の本質は「正義」であり、その神を畏れる人間の行為も「正義」であるとされている。

旧約聖書において「正義」は、まずは神との正しい関係である。それゆえ、神の与えた戒めを守るものが「正義」の行為と考えられた。創世記3章において、アダムとエバは神が「食べてはいけない」と禁じた「善悪の知識の木」の実を蛇の誘惑によって取って食べた。これは、「正義」の行為ではない。それゆえ、厳しい罰が与えられた（樂園からの追放）。旧約聖書には、「十戒」（出20:1-17）、「契約の書」（出20:22-23:33）、「神聖法集」（レビ17-26章）などにおいて多くの戒めが与えられている。出エジプト記23章2節には「あなたは多数に従って悪をおこなってはならない。あなたは訴訟において、多数に従って片寄り、正義を曲げるような証言をしてはならない。また貧しい人をその訴訟において、曲げてかばってはならない」（口語訳）とあり、正しい裁判を行うことが「正義」だとされている。また、23章6節には、「あなたは訴訟において乏しい人の判決を曲げてはならない」とある。また、申命記25章1節には「二人の間に争いが生じ、彼らが法廷に出頭するならば、正しい者を無罪とし、悪い者を有罪とする判決が下されねばならない」とある。

神によって与えられた戒めは、人間を縛り付ける冷たい法ではなく、人間に命を与えるものである。レビ記18章5節には「わたしの掟と法とを守りなさい。これらを行う人はそれによって命を得ることができる」とある（箴4:4, 7:2も参照）。また、エゼキエル書18章9節では「わたしの掟に従って歩み、わたしの裁きを忠実に守るなら、彼こそ正しい人（ツァディーク）」

で、彼は必ず生きる」と言われている。そして詩編1編1-2節では「幸いな者。悪しき者の謀に歩まず、罪人の道に立たず、嘲る者の座に着かない人。主の教えを喜びとし、その教えを昼も夜も唱える人」（聖書協会共同訳）と言われ、これが「正しき者（ツァディーク）」（6節）だと言われている。

G. フォン・ラートは詩編15編、24編を「門の式文」と呼んだ³³。それは、神殿に参拝に来た巡礼者に神殿の門で祭司が入場資格を問うたものだ、と言う。24編3-5節には次のようにある。「誰が主の山に上り、誰がその聖所に立つのか。汚れのない手と清い心を持つ人。魂を空しいものに向けず、偽りの誓いをしない人。その人は主から祝福を、救いの神から正義を与えられる。」（聖書協会共同訳）神殿は命の領域と考えられた。そこで、そこに入ることのできる人は、神の戒めを守る「正義（ツェダカー）の人」だというのである。

旧約聖書には、「正義」の神の裁きが果たして「正しい」のかという懐疑が訴えられる場合もある。これは、神学的には「神義論」と言われる。「神義論」という用語は、ライプニッツ（Gottfried Leibniz）の1710年の著作 *Essais de Théodicée sur la bonté de Dieu, la liberté de l'homme et L'origine du mal*（『神の善意、人間の自由意志、および悪の起源についての神義論の論文』）に由来する。ここのThéodicéeは、ギリシア語のtheos（神）とdike（正義）の合成語である³⁴。神が全能で善であるとするなら、その神が創造した世界も善であるはずである。しかしながら世界には災難や矛盾、苦しみや理不尽な現実など悪の様相を呈するものが多くある。このような現実直面したときに、全能で善である神への信仰に懐疑がもたらされる。エレミヤは「正しいのは、主よ、あなたです。それでも、わたしはあなたと争い、裁きについて論じたい。なぜ、神に逆らう者の道は栄え、欺く者は皆、安穩に過ごしているのですか」（12:1）と言って、正しいはずの神の人間への扱いが間違っていると訴えているのである。旧約聖書において「神義論」の問題を取り扱っている文学作品は「ヨブ記」である。この作品において主人公のヨブは、全く正しい人であったが、大きな災難に遭った。この時ヨブは、神の自分に対する扱いが間違っていると抗議したのである。ヨブ記31章ではヨブは自分がいかに「正しい」かを訴えている。ここでまず6節において、「正義（ツェデク）を秤として量ってもらいたい。神にわたしの潔白を知っていただきたい」と言って自分が「正義」であることを訴えている（27:6も参照）。そして、自分の善行を列挙していくのである。すなわち、「わたしが隣人の妻に心奪われたり、門で待ち伏せたりしたことは、決してない。」（9節）、「わたしが奴隷たちの言い分を聞かず、はしための権利を拒んだことは、決してない。」（13節）、「食べ物独り占めにし、みなしごを飢えさせたことは、決してない。」（17節）、「着る物もなく弱り果てている人や、からだを覆う物もない貧しい人を、わたしが見過ごしにしたこと

³³ G. フォン・ラート、前掲書、p. 499。

³⁴ 樋口進「神義論」、関西学院大学キリスト教と文化研究センター編『キリスト教平和学事典』教文館、2009年、p. 209参照。

は、決してない。」(19節)、「わたしが裁きの座で味方の多いのをいいことにして、みなしごに手を振り上げたことは、決してない。」(21節)、「財宝の多いことを喜び、自分の力を強大だと思ったことは、決してない。」(25節)、「わたしを憎む者の不幸を喜び、彼が災いに遭うのを見て、わたしがはやしたてたことは、決してない。」(29節)、「呪いをかけて人の命を求めることによって、自分の口が罪を犯すのを許したことは、決してない。」(30節)、「わたしがアダムのように自分の罪を隠し、咎を胸の内に秘めていたことは、決してない。」(33節)、「わたしが金を払わずに収穫を奪って食べ、持ち主を死に至らしめたことは、決してない。」(39節)などである。ヨブは、このように「正義」の行為を行っているのに、なぜ災難が降りかかるのかと神に問うが、神はそれに何ら答えない。「ヨブ記」には、「なぜ正しい人が苦しむのか」についての答えがないと言われたりもする。しかし、神は最後にヨブに創造の世界を見せると(38-41章)、ヨブは沈黙してしまう。そして、ヨブは自分がいかに無知であるかを告白し、悔い改める(42:1-6)。前述のように、神によって創造された世界は秩序あるもので、それが「正義」である。ヨブは、自分に降りかかった災難にのみ目を向けて不平を述べていたが、秩序ある創造の世界を示されて、神が「正義」であることを悟った、ということであろうか。

4. 預言者における「正義」

旧約聖書において「正義」を主張したのは、特に預言者たちであった。彼らは、特に支配者階級が神によって与えられた戒めを破り、弱い立場の者を虐げたときに、ヤハウエによって遣わされ、彼らに「罪の告発」をし、また神の「裁きの宣告」をした。

アモスの活躍した紀元前8世紀、イスラエルはヤロブアムⅡ世の治世下において繁栄していた。しかしこのような繁栄は、支配者階級によって農民階級が搾取されたことによって成り立っていたのである³⁵。そこにおいては、イスラエルの社会的「正義」は著しく踏みこじられていた。この時代、支配者階級はイスラエル古来の土地法を無視して、王国成立前の部族連合時代から大切にしてきた嗣業の土地(ナハラ)を農民階級から巧みに取り上げ、大土地所有を拡大していたのである。貧しくなった農民は、わずかな負債のために債務奴隷にされ(アモ2:6, 8:6参照)、法外な科料を科され(2:8参照)、偽りの秤によってだまされ(8:5参照)、不正な売買をされ(8:6参照)、賄賂によって不公平な裁判にかけられたりした(2:7, 5:10, 12参照)。このような状況の中であってアモスは、「契約の書」(出20:22-23:33)などのイスラエルに古くからある法に則って「公正(ミシュパート)」と「正義(ツェダカー)」を主張した³⁶。アモス書5章24節には「公正(ミシュパート)を水のように、正義(ツェダカー)を

³⁵ 樋口進『古代イスラエル預言者の特質』、p. 76 参照。

³⁶ Cf., Ernst Würthwein, Amos-Studien, ZAW 62(1949/50), S. 48.

大河のように、尽きることなく流れさせよ」(聖書協会共同訳)とある。この対になっている概念(ミシュパートとツェダカー)は、正しい秩序と社会機構およびあらゆる階級の権利を重んじる手続きが保たれることを意味した³⁷。宗教の営みが盛んに行われている社会であっても(5:21-23 参照)、その正しい秩序を重んじない社会は存続するに値しない。アモスは、没落した農民を「正しい者(ツァディーク)」と呼ぶ(2:6)。これは嗣業の地(ナハラー)に住む正当な権利を持つ共同体の成員としてのイスラエル男子を指す。ルートヴィヒ・ケーラーによると、この成員は元来自分の地所を所有し、結婚、祭儀、戦闘、裁判における4大権利を有していた、と言う³⁸。アモスは、このような正当な権利を持つ自由農民が支配者階級の横暴によって債務奴隷に転落させられている現実を、「正義」を踏みにじる行為として告発したのである。

イザヤは、イスラエルの神を「聖なる神」と特徴づけたが、これは同時に「公正(ミシュパート)」の神であり、「正義(ツェダカー)」の神だと言う。5章16節には「しかし、万軍の主は公正(ミシュパート)によって高くされ、聖なる神は正義(ツェダカー)によって、自ら聖なる者であることを示す」(聖書協会共同訳)とある。しかしイザヤは、当時のイスラエルの支配者層が本来「公正」と「正義」をもって弱い立場の者の権利を守るべきであったのに、「正義」を著しく踏みにじったと非難した(1:21-23、5:7 参照)。イザヤもアモスと同様に、弱い立場の者の立場に立ち、イスラエルの古い時代からの法に則り、弱者の保護(1:17 参照)、また「公正」と「正義」を主張した(5:7、16、9:6、16:5、28:17、32:1、16、33:5 参照)。しかし、やがて理想的な王が現れると、「公正」と「正義」を持って統治し、平和を実現すると期待した(9:5-6、11:1-5 参照)。

アモス、イザヤと同時代(紀元前8世紀)に活躍したミカも、古くからの法(特に土地法)を主張し、それを無視して大土地所有を行っていた支配者階級を非難し、「公正(ミシュパート)」を主張した。6章8節には「人よ、何が善であるのか。そして、主は何をあなたに求めておられるか。それは公正(ミシュパート)を行い、慈しみを愛し、へりくだって、あなたの神と歩むことである」(聖書協会共同訳)とある。

紀元前7世紀に活動したエレミヤも、古くからのイスラエルの伝統であるヤハウェとイスラエルとの正しい関係である「正義」と「公正」を主張した。22章3節には「主はこう言われる。公正(ミシュパート)と正義(ツェダカー)を行い、搾取されている者を、虐げる者の手から救いなさい。寄留者、孤児、寡婦を抑圧したり虐待したりしてはならない。また無実の人の血をこの場所で流してはならない」(聖書協会共同訳)とある。

³⁷ J. ブレンキンソップ『旧約預言の歴史』樋口進訳、教文館、1997年、p. 14 参照。

³⁸ ルートヴィヒ・ケーラー『ヘブライの人間』池田裕訳、日本基督教団出版局、1970年、p. 175。

エレミヤと同時代に活躍したゼファニヤも、「公正」と「正義」を求めた。ゼファニヤ書2章3節には「ヤハウエを求めよ。地上で苦しむすべての者たち、ヤハウエの公正（ミシュパート）を行った者たちよ。正義（ツェデク）を求め、謙遜を求めよ。主の怒りの日に、あるいは、かくまってもらえるであろう」（私訳）とある。

ユダ王国の滅亡（紀元前587年）とバビロン捕囚を自ら体験し、バビロンで活動したエゼキエルも、捕囚の地で「公正」と「正義」を訴えた。エゼキエル書45章9節で「イスラエルの指導者たちよ、もう十分だ。暴虐と抑圧をやめよ。公正（ミシュパート）と正義（ツェダカー）を行え。私の民から強奪をするな」（聖書協会共同訳）と訴えている。

同じくバビロン捕囚の地で活動した無名の預言者（「第二イザヤ」と呼ばれるのが通例となっている）は、「正義」を「恵み」や「救い」とほとんど同義で使っている。イザヤ書51章5節で「私の正義（ツェデク）は近く、私の救いは現れた」と言われている。第二イザヤの預言した「主の僕」は、諸国に正義と公正を行う使命を帯びていた（イザ42:1-4）。この人物は、霊を与えられ、諸国民に正義をもたらし、国際関係によくあった暴力と残虐行為を終わらせる責任が課せられている³⁹。

グンター・ヴァンケは、預言者の批判は、絶えず上層階級が古来の農民の社会秩序を破壊し、格差を増大させたことに向けられた、と言う⁴⁰。そこで預言者たちは、古い時代からのヤハウエの秩序である「公正」に基づく社会、およびこの秩序に対応した行為である「正義」を主張したのである。そして公正と正義の踏みにじられた現実に対してやがてヤハウエによって厳しい裁き（国家滅亡、捕囚）が下されると警告したのである。

結び

夙川学院の教育理念で謳われている「正義」は、イエス・キリストの教えの重要なもののひとつであるが、これは旧約聖書の思想の影響が大きい。旧約聖書において「正義（ツェデク、ツェダカー）」は、基本的に神と人間との関係、人間と人間との関係が正しいことを表した。特に、弱い立場の者に配慮することが「正義」の重要な行為である。夙川学院の教育理念で「正義を愛する徳の高い人を育てる」と謳われているが、「正義」をもって、弱い立場であることの教育に当たる質の高い保育者を世に送り出す使命を担うことが重要であろう。

参考文献

- 1) Ernst Würthwein, Amos-Studien, *ZAW* 62(1949/50)
- 2) ルートヴィヒ・ケーラー『ヘブライ的人間』池田裕訳、日本基督教団出版局、1970年

³⁹ J. プレンキンソップ、前掲書、p. 234 参照。

⁴⁰ Gunther Wanke, Zu Grundlagen und Absicht prophetischer Sozialkritik, *KuD* 18(1972), pp. 2-17.

- 3) Gunther Wanke, Zu Grundlagen und Absicht prophetischer Sozialkritik, *KuD* 18(1972), pp. 2-17
- 4) G. フォン・ラート『旧約聖書神学』1、荒井章三訳、日本キリスト教団出版局、1980年
- 5) 東京神学大学神学会編『旧約聖書神学事典』教文館、1983年
- 6) 『聖書 新共同訳』日本聖書協会、1989年
- 7) F. Brown, S. Driver and C. Briggs, *The Brown-Driver-Briggs Hebrew and English Lexicon*, Hendrickson Publishers, 1996
- 8) J. ブレンキンソップ『旧約預言の歴史』樋口進訳、教文館、1997年
- 9) W. ツィンマリ『旧約聖書神学要綱』樋口進訳、日本キリスト教団出版局、2000年
- 10) 関西学院大学キリスト教と文化研究センター編『キリスト教平和学事典』教文館、2009年
- 11) 樋口進『古代イスラエル預言者の特質』新教出版社、2013年
- 12) W. ブルッゲマン『旧約聖書神学用語辞典』長谷川忠幸訳、日本キリスト教団出版局、2015年
- 13) A. ベルレユング、C. フレーフェル編『旧約新約聖書神学事典』教文館、2016年
- 14) 樋口進「旧約聖書における『平和』思想」、『夙川学院短期大学研究紀要』第45号、2018年、pp. 3-15
- 15) 『聖書 聖書協会共同訳』日本聖書協会、2018年
- 16) 樋口進「聖書における『愛』と『誠実』」、『夙川学院短期大学教育実践研究紀要』第13号、2019年、pp. 3-8